

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 平成27～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～宮崎県～

ゴールイメージ

宮崎県の目指す教師像

「小・中・高のつながりを意識し、専門性と自信をもって、授業改善に取り組む教師」

宮崎県の目指す高校卒業時の姿

「自分の意見や考えを即興性を意識して論理的に表現できる(資質・能力のある)生徒」



取組内容について

- 1 域内研修(英語推進リーダーによる伝達講習)(H26～31)
・伝達講習、授業実践報告、外部検定試験の受検。
- 2 ALT指導力等向上研修会
・中学校、高校全ALTが出会。外国語担当教員とのモデル
チームティーチング授業。
- 3 研修協力校でのCAN-DOリスト研修会(H27～29)
・各校での授業公開、協議及び外部専門講師による講義。
- 4 小学校外国語教育推進協議会(H30)
・推進校の研究等をもとに各教育委員会や各学校を支援。
- 5 小学校外国語教育セミナー(H30)
・中、高学年の学級担任等への指導方法の普及。
- 6 小学校英語枠採用教員等の資質向上研修(H30)
・高い専門性をもった指導者の育成。
- 7 生徒の発信能力育成のための中高授業研修会(H30～)
・研究協力校の事例発表、中高合同の協議・発表。

独自の工夫等について

- 1 域内研修
域内研修受講者全員が外部検定試験を受検。
- 2 ALT指導力等向上研修会
県立高校配置ALTに指導力向上研修「ピアオブザバージョン」の実施
- 3 研修協力校でのCAN-DOリスト研修会
H28年度は中高合同で授業公開、協議を実施。
- 7 生徒の発信能力育成のための中高授業研修会
県内3地区ですべての中学校、高校から教員が参加。

成果・効果

小学校における次年度からの外国語教育の移行措置へ向けて、計画的に準備が進められている。

授業における英語担当教員の英語使用力の改善。

生徒の英語力の状況が改善。

中学校及び高等学校において「CAN-DOリスト」の整備の推進が図られた。

	平成25年度	平成29年度
< 中学校 >		
担当英語教員の英語使用力……	28.2%	39.7%
生徒の英語力の状況……	31.3%	41.3%
「CAN-DOリスト」の設定率……	24.3%	100%
< 高等学校 >		
担当英語教員の英語使用力……	66.5%	85.1%
生徒の英語力の状況……	32.1%	39.1%
「CAN-DOリスト」の設定率……	99.1%	100%



成果の普及、周知について

CAN-DOリスト研修会及び中高授業研究会において中・高から各1名参加し、研究協力校の取組を伝達。

- 県立高校39校のCAN-DOリストを冊子にして配布。
- すべてのALTによるチームティーイングの実践集の作成、配布。

今後の課題等

即興性を意識した、統合的な言語活動を行う授業改善の充実

- 「話すこと(やりとり)」に係る評価の在り方
- 小中高の連携の深化

目的

・CAN-DOリストの作成と活用を授業指導及び評価方法の改善につなげることを通し、生徒の英語力向上を図る。

取組の内容

CAN-DOリストを活用した学習指導方法の工夫

- ・「CAN-DOリスト」を踏まえ、単元毎に学習到達目標を示すことで、生徒に学びの見通しをもたせ、動機づけを図る。
- ・第1学年では、英語習得の基礎を身に着ける観点から、「聞く」「話す」力を鍛えるために、音声重視の指導を展開する。
- ・ペア・グループ活動を積極的・意図的に行い、学び合い活動を通して英語力の向上を図る。
- ・ICTを活用した生徒たちにより分かる授業を創造する。

評価方法の工夫

- ・「できるようになったこと」を確認するために、単元毎に自己評価を行ったり、定期的に生徒用CAN-DOリストで振り返ったりする場を設定する。
- ・定期的にパフォーマンステストを行う。

成果

生徒の「聞く」力が県・地区平均以上

(県英語一斉テスト)

平成30年11月実施

	リスニング問題
学校の大問別得点率	96
地区の大問別得点率	94
県の大問別得点率	93

成果

意図的なグループでの活動を取り入れることで、生徒の学びを促進することができた。

・生徒の夏休み後のアンケートで英語の授業で不安な点はあるかとの問いに5段階で4・5を選択した生徒が65%であった。一方で、1・2を選択した不安を抱えている生徒は、約10%存在した。その不安を軽減するための手立てとしてEnglish Leaderを中心としたグループを編成し、活動を始めた。すると評価1・2を選択した生徒の8割以上が、グループ活動を始めたことで、より良い学びができていると答え、5割が4・5の評価に変わっている。全体的にもグループ活動を肯定的にとらえている生徒が多い。

【生徒の感想】

- 「分からない単語や文章があった時に、まわりにいる人に聞いたら、しっかりと教えてくれる。」
- 「グループでまとまっていた方がすごく聞きやすい。苦手だった所も、分かるようになってきた。」
- 「人に教えることで、自分も分からないところが見えて、それを知ることができ、その人も覚えられているので、よいと思う。」
- 「分からないところがあったら、すぐにどういうことが聞きにきてくれる。自分も相手も勉強になる。答えが分かっても、なぜそうなるのかがまだ分かっていないから、そこをもう少し頑張りたい。」

今後の課題・方向性

CAN-DOリストをより効果的に活用ができるものへと検討し、整備していく。

「聞く」「話す」力をより向上させるとともに、「読む」「書く」力を鍛えるための指導方法の工夫をしていきたい。

成長に合わせて、英語使用率を高めていき、より積極的に英語でコミュニケーションを図ることのできる授業の雰囲気を作っていく。

ペア・グループをより効果的に活用する授業展開の工夫と、それがslow learnersのより良いサポーターとなる環境へとつなげていきたい。

新学習指導要領の改訂についての理解をより一層深め、小学校との連携を強化することで、英語教育における効果的な接続や児童生徒の英語力向上に努めていきたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～小林市立野尻中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・ 地区の平均点や県の平均点に到達できておらず、英語学習に対する苦手意識をもつ生徒も多いため、学習意欲を高めるような取組を考え、各学年で実践する。
- ・ 定期的に検証テストを行いCAN-DOリストを活用してはいるが、さらに効果的な活用の仕方考え、全学年共通実践する。

具体の取組の内容

外部専門機関の指導法を生かした授業改善

- ・ 中央研修で学んだ指導法を生かして授業を改善し、その指導法を英語科教員で共有し合うことで校内の共通実践事項として広げ、授業での導入時の帯学習や展開段階における言語活動等で活用を図った。

指導形態の工夫

- ・ 各学年2名の担当教諭を配置し、チームティーチングや少人数指導等、生徒の実態や発達の段階に合わせて指導形態を柔軟に変化させつつ、よりきめ細やかな指導ができるように指導形態の工夫を図った。

各種コンテスト、英語検定、地区暗唱弁論大会等への挑戦

- ・ 宮崎県英単語コンテストや小林市基本文コンテストに向けて、校内で実施しているパワーアップタイム(学力向上の取組)と連携して学級平均点を競わせたり、満点獲得者を集会で表彰したりした。英語検定や地区暗唱弁論大会への挑戦を呼びかけ、学習会や校内オーディション等を行って多くの参加者を募った。

成果

3年生の地区学力診断テストの結果を見ると、本校の学校平均点は全教科において地区平均点を下回っていた。英語は6月は地区平均から-13点、9月は-9点、10月は-10点と、その差は縮まってきている。また、英語検定取得率も50%と3年生が最も多く、今年度だけで3級取得者が9名となった。県英単語コンテストでは、満点獲得者が全校で15名、小林市基本文コンテストでは14名であり、英単語や基本文を確実に覚えようとする努力の成果が見られた。

校内の主題研究で実施している授業アンケートで、肯定的な答えを選ぶ生徒や、授業終わりに実施している授業評価表において、意欲的に学習しようとする生徒の数が増えた。

成果

5月に3年生の授業の様子をビデオに撮り、外部専門機関との連携で授業改善を行った後に、再び9月に撮影した授業の様子と比較してみると、生徒の多くが集中して授業に臨み、間違ふことを恐れず意欲的に活動する様子が見え始めた。

10月に県の指導主事に撮影してもらった別の授業のビデオでさらに生徒の変容を検証してみると、本文の内容を自分の言葉に置き換えて説明するという課題に臆することなく取り組み、消極的だった生徒がクラスで発表できる段階にまで発展させることができた。

ALTの協力も得ながら、CAN-DOリストの検証テストを行うことにより、4技能をバランス良く高めることの必要性を実感させることができた。

今後の課題・方向性

今年度の取組によって、授業改善や生徒の意識向上につながる効果は見られたものの、学力診断テストや県英語一斉テスト等の結果から、特に「書く力」が弱いことが分かっている。「書く力」をつけさせるための具体的取組を考えていかなければならない。ワークシートやノート活用の工夫についての共通実践を図る予定である。

英語科教員間の情報共有や共通理解・共通実践事項をさらに密にし、CAN-DOリストの検証テストの結果分析を活用して、今後の重点事項を確認していきたいと考えている。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～延岡市立土々呂学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・課題 : 英語を運用することに自信がもてない生徒、基礎・基本の定着が十分に図れていない生徒が多い。
- ・手立て : 英語を活用する場面を多く設定する。基礎・基本定着のために有効な方法を実践・検証する。

具体の取組の内容

- 授業において、英語の使用場面を増やすことで、聞くこと、話すことに慣れさせる。
- ・教師は、順序立てた短い英語での指示や指導をこころがけ、生徒に英語を通して理解する体験をさせる。
 - ・生徒に「クラスルームイングリッシュ・リスト」を配付し、授業の初めと終わりのあいさつや机間指導時の生徒からの質問などのやりとりも簡単な英語で行わせる。(例: “Excuse me. How do you say this in Japanese?”)
 - ・授業の中で、基本文を取り入れたペアでの会話活動や、教師から生徒へ、または生徒から教師へのQ&Aを行い、生徒の即興性を高める。
- 定期テスト等を活用して、基礎・基本の定着を図る。
- ・テスト後、間違っただもののやり直しや同じ問題を使った練習プリントなどを課題として出して十分に復習させ、再テスト等で確認を行う。
 - ・再テストであっても、高得点者を紹介したり、得点が大きく伸びた生徒を褒めたりして、「やればできる」ことを実感させるとともに、よりよい学習方法について指導する。

成果

英語の授業に関するアンケートより
3年生で「英語の授業が楽しい」と回答した生徒の割合(%)

7月	70
12月	80

3年生で英語検定3級以上を取得した生徒の割合(%)

H29年度	15
H30年度	20

成果

授業の中での教師と生徒、生徒と生徒のやりとりにおいて、英語を使う量が増えた。
英語の授業以外で英語を使う場面が増えた。
(例)職員室で、授業連絡の生徒が教師に
“Excuse me. What should we prepare for Friday's lesson?”
Q&Aや会話活動等でよく使われるフレーズが身につく、多くの生徒から自然に出てくるようになった。

今後の課題・方向性

- 授業における英語での生徒の活動の充実
- ・教師のわかりやすい指示や適切なモデル提示のあり方、多くの生徒が無理なくできる活動のあり方について研究し、実践する。
 - ・授業での学びを定着させる学習方法の指導
 - ・家庭でできる復習の仕方や適切な量の課題のあり方、効果的な取り組みせ方などについて研究し、実践する。
 - ・習熟度の低い生徒への指導法の工夫
 - ・フォニックスなどを十分に活用し、特に「発音できる・読める」から「書ける」への指導・支援のあり方を研究し、実践する。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮崎県立日向高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

課題：英語の家庭学習時間(平日平均67分)に対して、「読む(11分)・聞く(7分)・話す(3分)・書く(1分)」それぞれに割り当てられる学習時間が少ない→「**技能習得に繋がらない英語学習**」が実態
 手立て：「**5領域統合型の授業**」と「**ゴールイメージの明確化**」で**発信能力の育成**を図る

具体の取組の内容

5領域統合型の授業展開～パフォーマンステストを軸にして～

- ・既習事項定着の場としての発信活動 / (例) 5文型の学習→5文型全てを盛り込んだ学校紹介文の作成(書くこと)。
- ・発信活動と日々の学習が乖離しない授業展開 / (例) 学習→発信活動(定着)→パフォーマンステスト(集大成)
- ・ALTと協働で授業企画・展開 / (例) 教科書を基に、既習事項を活用できるオリジナルパフォーマンステストを考案。
- ・年間5回のパフォーマンステストを実施 / (例) 自己紹介(5文型)・Picture Description(進行形)・Skit(仮定法)
- ・校内Skit大会の実施 / 2017年度1～2年生各クラスから選抜された計12組が体育館で発表。最優秀賞を決める。

ゴールイメージの明確化～大学進学にも、グローバル社会にも対応できるauthenticな英語力の育成

- ・「英語ができる」「大学入試に対応できる」
- ・「物怖じせずコミュニケーションができる」
- ・「生徒が身につけたい英語力」と「グローバル社会で求められる英語力」が統合したゴール(「教養」と「実用」のバランス)

外部専門機関との連携 (中高合同研修会における事例発表)

成果

生徒の自宅における英語学習量の変容

家庭学習に占める時間(分)	18年5月	18年12月	差(分)
読む	11	11	0
聞く	7	9	+2
話す	3	3	0
書く	1	6	+5
英語家庭学習時間	67	63.6	-3.4

- ・年度当初は「単語の練習」「文法事項の整理」などが中心であった自学ノートに、エッセイライティングやリスニング学習の跡が見られるようになった。
- ・以前は漫然としていた家庭における英語学習が、5領域統合型授業の実施と共に、技能習得のための学習へと変化している。

成果

生徒の英語力の変容

(1)「読む」「聞く」「書く」に関する技能向上

得点率(%)	1年7月	1年11月	差(ポイント)
読解	25.3	31.5	+6.2
リスニング	42.2	47.8	+5.6
表現力	14.0	15.0	+1.0

(1年7月・11月実施進研模試を用いての比較/母数187名)

(2)「話す」に関する技能向上

- ・英語を話すこと自体に抵抗を感じていた生徒が多かったが、2学期現在話すことに抵抗を感じる生徒数は全体の1割以下である。
- ・発表の場面においては、ゆっくりではあるが考えながら自らの言葉で話せるようになってきている。やりとりの場面へと発展させるのが今後の課題である。

成果

生徒の英語に対する意識の変容

(1)各4技能に関して「好き」と答えた生徒の人数

好きと答えた人数(人)	読む	聞く	話す	書く
5月	88	74	72	68
12月	94	83	70	76
差	+6	+9	-2	+8

(2)英語学習に対する生徒の意識

英語学習に対する生徒の意識(人)	5月	12月
英語を使って、国際社会で活躍できるようになりたい	20	19
大学で自分が専攻する学問を英語で学べるようになりたい	6	5
高校卒業後に、海外の大学などに進学できるようになりたい	2	2
高校在学中に留学して、海外の高校の授業に参加できるようになりたい	1	5
海外でのホームステイや語学研修を楽しめるようになりたい	9	17
海外旅行などをするとときに、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい	45	50
大学入試に対応できる力をつけたい	104	85
特に学校の授業以外での利用を考えていない	2	6

・各活動に対して「好き」と感じる生徒、英語運用へ意識が高まる生徒が増えた。
 (「学校実施アンケート」より)

今後の課題

各技能の数値的向上

教師の体感的に各領域の技能向上は感じられるが、感覚的な物を数値として把握し取組を再評価する必要がある。今年度GTEC(6月・12月)の4技能版を実施したが結果が送付されるのは1月以降であるため、特に「話す」については数値的検証はできていない。

小・中・高連携

今後は、小中高9年間に渡る英語教育の完成期としての英語力育成の観点に立ち、これからの生徒の学習履歴への理解を深めるため、小中との連携がより必要になってくると考える。

目的

- ・発信力を育成する授業改善の取り組み ～「話すこと」「書くこと」の指導を通して～
- ・英語学習への動機付けを図る

取組の内容

アウトプット活動の充実

- 1) 帯活動でのsmall talk
 - ・1年生では1分間スピーチ
 - ・2年生では2分間のsmall talk とその後のwriting(約4分)
 - ・トピックはできるだけ身近な話題を用意
- 2) 教科書内容のretelling
 - ・定期考査では毎回retellingを書かせる。
 - ・写真を多く用いてretellingの内容が充実するようにする。
- 3) ALTとのTTの授業では必ず最後にwritingをさせ、定期考査で評価。
 - ・ストラクチャーに留意させ、論理的な英文を毎週異なるトピックについて書く。
- 4) 即興型ディベートの導入

リスニング活動の充実

- 1) dictoglossを用いた内容導入
- 2) リスニングによる内容理解、定期考査で評価。

公開授業(11月6日実施)

帯活動→教科書の内容に関するディスカッション
→各グループの意見を英語で発表



外部専門機関との連携

中高合同研修会における事例発表。

宮崎北高校国際交流プログラムにおける海外高校生との授業交流

実験教室(化学・生物・食の安全分析)
ディスカッション(コンセンサスゲーム)
ディスカッション(課題研究)
Earth Science(学校設定科目)
日本文化体験(華道・書道・茶道・剣道)



成果

1年生

進研模試における表現力問題の得点率の上昇

- ・1学期(17.4%)→2学期(19.5%)
- ・英語表現問題を空欄にする生徒の減少。
- ・模試の偏差値2.6ポイント上昇

2年生

スタディサポート学習状況リサーチ結果より学習意識に関して

カテゴリー	改善したい項目	2年生1回	2年生2回
意識	英語が苦手	42.3%	41.5% ↓
悩み	心配がある	90.1%	82.0% ↓
授業理解度	授業についていけない	15.1%	8.4% ↓

授業理解度の数値が激減している。参加型の授業ではペアワークやグループワークでの助け合いが英語の苦手な生徒にとって助けになっているのではないかと推察される。

成果

英検受験者総数増加

()内は前年度受験者数

1年生 325人 ↑ (155人)
2年生 346人 ↑ (302人)
3年生 263人 ↓ (268人)

合計 934人 (725人)

英語教育実施状況調査より

- ・授業における、生徒の英語による言語活動時間の割合が増えている。
- ・コミュニケーション英語 と英語表現 では75%以上となった。
- ・同様に、授業における英語担当教師の英語使用状況も発話の75%以上を英語で行っている割合が増加している。

今後の課題・方向性

帯活動において、ただ英語を話し、英語を書くだけの指導に終始しないための工夫
・英作文の添削で、どこまで文法指導を行うか。

帯活動でのtopicの選び方

・1分間の準備時間で生徒ができるだけ多く意見を出せるようなtopicで、3学年で共有出来るものを準備。

3年間を見通した授業計画の立案

・「北高スタイル」の確立を行い、言語活動やその難易度、また3年間を見通したパフォーマンステストの計画。

教材の共有と教員の連携強化

・誰が教えても同じ内容になるよう、教材の共有をし、また縦横の学年の連携強化。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～宮崎県立日南振徳高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

【課題】 授業で学んだことを実践的に使う場が少ないため、自ら考え、英語で発信する態度が十分に身につけていない。

【手立て】 授業における発信力育成のために、パフォーマンステストを行い、自ら考え、英語で発信する態度を育成する。

また、クルーズ船寄港の際に、乗客やクルーとの対話、アンケート活動等を行い、実践的に英語を使う場面を設ける。

取組の内容

英語を使い、自ら考え自ら発信する態度の育成

生徒が発信する場としてインタビュー、プレゼンテーション、スモールディベートといった様々な言語活動を行い、確認のためのパフォーマンステストを定期テスト毎に行う(全学科)。

実践的な場での英語の活用

近隣の港に寄港するクルーズ船の乗客・乗員に対し、英語で町案内や施設のガイドを行ったり、課題研究に繋がるアンケート等を行う(商業科・経営情報科)。

外部試験の受験の奨励

英語検定の受験を積極的に進める。

外部専門機関との連携

中高合同研修会における事例発表。



成果

パフォーマンステストに関するアンケートより

・自分の考えを発信しようとする態度を身に付けるために以下の活動を行った。

授業における様々な言語活動
パフォーマンステスト

これらの活動で、自ら考え、英語で発信しようとする態度が身に付いたと考える生徒の割合は学年で59.8%であった。

・パフォーマンステスト等を通し、実際に自ら考え、英語で発信できるようになったと考える生徒の割合。

4月	7月	11月
8.0	20.0	57.5

成果

実践的な場での英語の活用

・パフォーマンステストに加えクルーズ船活動を行うことで、自ら考え、英語で発信しようとする態度が身についたと考える生徒の割合が学年全体と比較して高くなった。

学年全体	クルーズ船活動経験クラス
59.8	68.4

・クルーズ船の乗員、乗客に対し、町の案内や施設のガイドを英語でできるようになっただけでなく、アンケート活動等を通して、町の課題を認識し、課題研究のテーマを検討することができた。

・積極的に話しかけることで、英語を使うことへの恐れや躊躇が少なくなり、自信を持って話せるようになった。

今後の課題・方向性

評価システムの確立

生徒の自己評価は高くなってはいるが、実際に自ら考え、発信できているか、評価できるような英語科共通の評価システムを確立させる。

英語検定の受験者数の増加

客観的に生徒の能力を測る一つの指針として外部試験を積極的に受験させる。総合性専門高校ということで、専門の検定試験が多く、英語検定の受験機会が少ないので、関係学科との連携を深める。

校外活動の充実

実践の場としてのクルーズ船寄港時の活動をより充実した内容にしていく。